
神様がくれたチャンス

白峰黒子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

神様がくれたチャンス

【Nコード】

N6496H

【作者名】

白峰黒子

【あらすじ】

親友を亡くしてしまった少女の運命が変わる話……そしてそのきっかけをあたえた神様のお話

「お初にお目にかかります」

と青年が口を開く。

青年がいるのは巨大な洋風の部屋である。

部屋には古今東西のありとあらゆる分野の美術品が飾られていて、いくつもの窓から光が差し込んでいるにもかかわらず、少し不気味な雰囲気を生み出していた。

青年は小さなテーブルの傍に置かれている椅子に右手をテーブルに置き足を組んで座っている。

青年は黒いスーツに白い手袋を身に着けており、執事を連想させる服装であった。

青年の容姿は年齢は20歳ほどであり、身長は175cmほど、ある一点を除けばごく普通の黒髪の青年である。

ある一点とは青年の目は右が灰色で左は黄色と、いわゆるオッド・アイであった。

それが原因か、どことなく神秘的な印象を受ける青年である。

「せっかく来ていただいたのですから：お話でもしましょうか：」

青年は話を続ける。

「『あなた』は突然の事故で大切な人を失ったことがありますか？」

青年はやさしい声でしゃべる。

「今から読んでいただく物語はその場面に直面した少女のお話です」
そこで青年は少しだけ悩むそぶりを見せて、口を開いた。

「：しかし少しだけ私が手を加えることにしましょう」

「『あなた』もこちらの結末の方が好まれるかもしれませんし：ふふふ：」

不適な笑いを浮かべ、青年は消えてしまった。

「なんで…」

この言葉を今日だけで何度言っただろう。

私は親友が棺の中で眠る場所で泣き崩れながらそんなことを頭のスミで考えていた。

私の名前は伊東香織 高校一年生の16歳。

親友の名前は山本渚 幼稚園からの付き合いで現在も同じクラスの親友である。

今その親友は棺の中でとても安らかな顔で眠っている。

「ごめんね…ごめんねなぎさ…」

私はその前で何度も謝っていた。

「大丈夫？」

後ろから声をかけられて、振り返ると自分の母親と弟がいた。

「あなたが謝ることないわ…渚ちゃんが亡くなったのは不慮の事故だったのよ…」

「姉さんがいつまでも泣いてたら…渚さんも悲しむよ…」

母親と弟の言葉は耳に入らなかった。渚の家族の顔を見てしまったからだ。

両親は二人とも目が赤くなっていて、お姉さんはまだすすり泣いていた。

見ていられずに視線を変えた先に参列者が目に入る。

参列者の中には同じクラスの友達や中学のころの友達など多くの人が渚のために集まっていた。

そして特に仲の良い智恵と有希を見つけた。

智恵はわんわん泣いていて、有希は目に涙を溜めながら智恵をなだめていた。

それを見ていると胸が張り裂けそうになり目を逸らした。

その時に渚の遺影が視界に入る。
棺の中の渚とは対称的に笑っていた。

ずっと見てきた親友の笑顔、見ているだけで笑みがこぼれてくる笑顔だった。

それをもう見ることはできない。

「っ！」

私はここにるのが辛くなって、式場から逃げ出した。

「香織っ！」

「姉さんっ！」

「香織ちゃんっ！」

そんな声が耳に届いたが、私は無視して家まで走った。

母や弟が家に着くと香織は部屋に鍵をかけて、呼びかけても何の反応もなかった。

私はベッドにうずくまって泣いていた。

「何で…どうして…なぎさあ…」

考えることは渚のことばかり。

親友との多くの思い出が香織にのしかかる。

そして香織は昨日のことを思い出していた。

「それでお兄ちゃん、ふられちゃったんだって」

場所とはある喫茶店、香織と渚は家が近いので一緒に帰り、どちらかの家にそのまま寄っていくのが中学生までの習慣だった。

しかし高校生になると学校帰りに他の友達と色々なお店に寄って行くのが新たな習慣になりつつあった。

この日も友達の智恵と有希と一緒に適当なお店を回った後、喫茶店

に入り4人でおしゃべりをしていた。

「あ、そろそろ帰らなくちゃ」

と渚が思い出したように言った。

「何か用事でもあるの？」

と智恵。

私が腕時計を見ると5時を示していた。私と渚は家まで電車と自転車を使うが、30分もかからないのでまだ急ぐような時間ではない。いつもはあと30分ほど遅く帰っている。

「今日はみなでご飯食べに行くの、けっこう人気のお店なんだって」

「そうなんだ、私も一緒に帰ろうか？」

と私が言うが、

「別にいいよ香織」

と言われ私は残ることにした。これが渚との最後の会話になるとも知らずに：

「ねえ、来週のあれどうしよつか？」

渚が店を出てすぐに智恵が口を開いた。

「え、なんの話？」

「忘れたの？」

「渚さんへのプレゼントですよ」

有希にまで言われ、私はようやく気がついた。

来週は渚の誕生日だった。

「すっかり忘れてた…」

「それでも幼馴染みななの？」

「珍しいこともあるんですね」

智恵は呆れていて、有希は笑っていた。

「と、とにかく、渚へのプレゼントをどうしよう？」

私はこの空気を壊すべく話を元にもどした。

「…そうね、三人で一つのを買うか…、別々に買うか…」
相談の結果、一つのをものを買うことになり、いろいろなお店を回ってプレゼントを決めた。

私は智恵たちと別れ、駅に向かった。

鞆の中にはさっき買った渚へのプレゼントが入っている。

電車の中で来週の渚の反応を考えると、おもわず笑顔になった。

電車から降りて、自転車に乗る直前に携帯が鳴った。

着信を見てみると母からだった。

「なにお母さん？」

「…香織、落ち着いて聞いて 渚ちゃんが病院に運ばれたわ」

いつも通りに電話にでた私には母の言ったことを理解するのに時間がかかった。

「…お母さん、もう一回言って」

私は自分の聞き間違いであることを願い聞き返した。

しかし返ってきたのは同じ言葉だった。

「そんな…」

私は言葉を失った。

「とにかく早く病院にいくわよ！」

そう言われて我に返った私は、急いで家に帰った。

家に帰ると鞆を玄関に投げてすぐに母と弟と病院に向かった。

病院に行く途中に母から事故のことを聞いた。渚は家に帰る途中に車にはねられたらしい。

現在は病院で緊急手術を受けているらしいが、とても危険な状態らしい。

車の中で私は渚が助かることを祈るしかなかった。

病院に着くと渚の母親が待っていた。私たちはおばさんの後に続い

て渚の手術室に向かった。

その間、母がおばさんを必死に励ましていたのを覚えている。

手術室の前に着くと渚の姉と父親が重苦しい空気の中で座っていた。そして私たちも近くの椅子に座った。

待っている間、誰もしゃべろうとはせずに沈黙が続く。

私は最悪のイメージを何度も振り払って、渚の手術成功を祈っていた。

そして一時間ほど経った時、手術室のドアが開き、医師たちが姿を現した。

渚の家族がすぐに駆け寄って医師の言葉を待つ。

結果は：

「渚…」

香織は少しだけ落ち着きを取り戻していた。母と弟が帰ってきてから数時間が経っていた。

「私があの時一緒に帰っていれば…」

渚の手術の結果を聞いた後に何度も後悔した。

「私は…どうすれば…」

そんな時、香織はあるものを思い出す。

自分の鞆、その中に入っている渚へのプレゼント。

鞆は母が運んでくれていて、自分の机の上に置いてあった。

香織はゆっくりと立ち上がり、鞆からプレゼントの袋を取り出して袋を開けた。

袋の中にあっただのはと茶色の革に金と銀で造られているきれいな腕時計だった。

通りかかったお店でたまたま見つけたもので、値段もそれほど高くなかったので、三人でお金を出し合い買ったものだった。

（明日おばさんに言って、渚のお墓に入れてもらおう）
そう思って香織は時計を枕の横に置いて眠りについた。

香織が眠りについた後に時計の針が逆向きに回っていることに気づくものはいなかった。

香織は誰かに体を揺すられて目を覚ました。

「あ、やっと起きた」

という声が聞こえてくる。

その声に周りを見渡すと、そこは自分が眠っていた自室ではなく見慣れた高校の教室だった。

そして自分の机を囲むように智恵と有希そして…渚が立っていた。

「な、渚！」

香織は渚を見た瞬間に座っていた椅子が倒れるほど勢いよく立ち上がり、自然と涙を流していた。

そしてそのまま渚に抱きついた。

「ど、どうしたの香織!？」

突然泣き出して抱きついてきた香織に声がひっくり返るほど驚く渚。

「ちょ、ちょっと!」

「!」

突然のことに反応するのが遅れた智恵と有希。

「なぎさ…なぎさ…なぎさ…」

香織はしばらくの間、泣きながら渚に抱きついて渚の名前を何度も呼んでいた。

あれから数分後、私は少しづつ冷静さを取り戻し、顔を真っ赤にして自分の席に座っていた。

「落ち着いた、香織？」

私の涙で濡れてしまった制服を着ている渚が明るい笑顔でやさしくたずねる。

「…うん、ごめんね渚」

もう二度と見ることができないと思っていた親友の笑顔を見れて、香織もまた笑っていた。

「いいよ、いつも香織に助けてもらってるし」

渚は明るい笑顔のまま私に言った。

「…ありがとう、渚」

「…それで一体どうしたの？」

「悩みがあるなら相談して下さい」

智恵と有希が心配そうな顔で私にたずねる。

しかし私は

「大丈夫、全部…全部夢だったから…」
と笑顔で答えた。

渚たちに聞いた話だと、私は最後の授業中からずっと眠っていたらしい。

そして先ほどの場面につながるようだ。

四人はそれからなにこともなかったかのように学校を出て、お店を回った。

発案者は智恵である。

「じゃあ、今日も遊びに行こう」

という提案に三人とも賛成したからだ。
そして今四人がいるのは喫茶店である。

香織は自分の夢と同じ喫茶店であることに気づかないフリをした。

「それでお兄ちゃん、ふられちゃったんだって」

しかし夢で聞いた話とまったく同じであることを無視することはできなかった。

（どういうこと…なんで夢とまったく一緒なの？）

そんなことを考えていると、

「あ、そろそろ帰らなくちゃ」

「何か用事でもあるの？」

「今日はみんなでご飯食べに行くの、けっこう人気のお店なんだって」

と渚と智恵の会話を聞いて私はハツとなる。

（ダメ！渚を一人で帰らせたら…）

「渚っ！」

「え、は、はい」

いつもとはちがう香織の声に渚は驚く。智恵と有希も驚いて香織を見ている。

「私も一緒に帰るわ！」

「べ、別にいいよ香織」

（ここで諦めちゃダメ）

「いいの！私も帰る！絶対に一緒に帰るから！」

「う、うん」

驚いている渚を連れて、香織は店を出ていった。

智恵と有希は香織の気迫に圧倒されて、口をはさむタイミングを完全に失い、しばらくしてから正氣に戻るようになった。

電車を待っている間、二人の会話はなかった。

（どうしたんだろ、今日の香織）

（渚が事故に遭うのは自転車に乗っている時よね、気をつけなきゃ）
そして電車に乗り込んで、空いている席に座ると不意に渚が香織の

あるものに気づく。

「あれ、香織って新しい腕時計買ったの？」

「えっ」

そう言われて腕時計を見てみる。

それはいつも自分がしている腕時計ではなく、夢で渚のプレゼントに買った腕時計だった。

（どうして…あれは夢じゃなかったの？　じゃあ私はタイムスリッ
プしたの？）

「香織？」

そう言われて我に返った香織は、心配そうな表情で見つめる渚に

「そ、そう、この前たまたま見つけて…つい買っちゃったの…」

と渚を安心させるために嘘をついて、無理やり笑顔を作った。

しかし渚の表情は変わらない。

「…香織、私に関係あることで何か隠してるでしょ？」

「っ！どうして？」

「分かるよそれくらい…どれだけ一緒にいると思ってるの」

驚く私に渚は続ける。

「香織の態度がいつもと違うのなんかすぐに気づくよ、私のことで香織が悩んでくれるのは嬉しいけど、香織が一人で抱え込んで苦しんでるのを見ると、私も辛いの。」

「…でも…渚…きつと信じてくれないよ…」

「私は香織の言ったことなら…信じる」

「…渚…ありがとう」

私は目に涙を浮かべながら渚に抱きついた。

私は電車から降りた後、渚にすべて話した。自分がタイムスリッ
プをしたことを。

「…そう…そんな事が…」

自転車を押しながら私たちは歩いていった。

「…信じてもらえないよね、こんな話…」

渚の反応を見て私はやっぱり言わなければよかったと思っていた。

「普通なら夢だっと思うよね」

「…そうだよね…」

「私は信じるよ、香織の話」

そういつて笑ってくれた渚。

しかし私は何も言えず、うつむいていた。

「…一つだけ、夢でも現実でも関係ないことがあるよ」

そう言っ渚は足を止めた

「？」

渚の少し後ろを歩いていた私も足を止めた。

「私ね、とっても嬉しいんだよ、香織が私のために泣いてくれて」

「！」

私はそれを聞いて顔が赤くなった。

「香織が私のために泣いてくれたことはホントでしょ」

「そ、それは…」

真っ赤な顔でなにか言う前に渚が言葉を続ける。

「それに香織が私を心配してくれる気持ちも本物だよ、だからこれだけは言わせて…ありがとう香織」

笑顔でその言葉を言ってくれた渚に私は自然に笑顔を返した。そして…

「私も…ありがとう渚」

自分の心が透き通っていくのを感じた。

あの後、渚と香織はいつものように話しながら一緒に帰った。

そして渚の家の近くまで歩いてきた二人は驚いた。

車が電信柱にぶつかって大破しているからだ。

その周りに何人か人が集まっている。

「…やっぱり、香織の言っことは本当だったね」

「よかった…渚を助けることができて」

私の言葉を聞いて

「香織は私の命の恩人ね」

と言って、渚はとびっきりの笑顔を私に向けた。

（ありがとう、神様）

そう思いながら、私は渚に笑顔を返した。

腕時計が無くなっていることに二人が気づくのはもう少し後の話

そこは最初に青年がいた部屋。

しかしいるのは青年ではなく少女だった。

少女は青年が座っていた椅子のとなりに置かれている椅子に座ってテーブルの上にある紅茶を飲んでいる。

服装は西洋人形のような衣装が白と黒で統一されており、唯一胸元のリボンが青い色をはなっている。

少女の容姿は年齢は14歳ほどで、身長は145cmほど、青い長髪のかわいらしい少女であった。

目は両目とも紫色をしている。

「おや、いらしてたんですか」

正面のドアから青年が入ってきて、少女に声をかけた。

青年の腕にはあの腕時計がはめられている。

「あなたと会うのも久しぶりね」

外見にふさわしくない冷たい声を少女が発した。

「ふふ、あいかわらず感情のこもっていないしゃべりかたですね」

そう言いながら少女の横に青年が座る。

「それで：どういったご用件でしょう？」

「安心して、あなたの領地を侵しに来たわけではない、あなたのやったことに少し興味を持ってね」

そこで少女は紅茶を口に入れる。

「人間の運命を少しだけ変えてみただけですよ」

「時を司どる神様がずいぶん酔狂なことをしたものね」

そう言って少女は微笑んだ。

「：ただの暇つぶしですよ、神と呼ばれる存在でも、何万年も生きていると、たいていのことには飽きますからね：」

そこで青年はいつの間にか置かれているもう一つの紅茶を飲んで、少女を見る。

「あなたも何かやってみたらどうですか？」

「私の力は：あなたも知ってるでしょ」

「そうでしたね：あなたの力は、僕よりもはるかに危険でした」
少女青年に笑みを向ける。

「だから、私をもっと楽しませて：あなたの力で」

「：単なる気まぐれが、大変なことになりましたね」

青年はため息を出して残っていた紅茶をすべて飲み干した。

「それでは：僕の力であなを最高に楽しませてさしあげましょう」

「期待してるわ、私を退屈させないでね」

少女がそう言った時には青年は消えていた。

「：」

少女は青年が座っていた椅子を少し見つめて呟いた。

「次の人間の運命はどう変わるのかしら：」

そう言ってしばらく目を閉じた少女は、目を開けて『あなた』を見ると

「『あなた』はどう思う？」

そう言って紅茶を飲み干した。

(後書き)

初めまして皆さん。

今回が初投稿なので未熟な部分も多かったと思いますが、最後まで読んでいただきありがとうございます。

もしあれば、感想やアドバイス等お願いします。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6496h/>

神様がくれたチャンス

2010年10月9日14時50分発行